

びびぎ



No.8

ドラム缶工業会会報

理事長就任に あたって

ドラム缶工業会理事長

永井 潤

(川鉄コンテナ株式会社
取締役社長)



このたび、安藤前理事長の後をうけ、第14代目の理事長に就任いたしました。

昭和27年に、前身のドラム缶倶楽部から改組されて以来、40有余年の歴史をもつドラム缶工業会は、これまで会員相互の親睦と、その時代の課題に対処しながら歴代の理事長をはじめ、諸先輩、関係者のご努力により健全な発展を上げてまいりました。

近年工業会を取り巻く情勢は、日本経済の転換期を迎え、ますます複雑化、多様化の様相を呈すると共に、国際的な広がりをみせております。

ご承知のように、当工業会や需要業界をはじめ、日本経済全般に長期に亘って、深刻な影響を与えてきました平成不況も、最近になってようやく回復の曙光が伺えるようになってまいりました。しかしその回復基調は緩やかであり、今後とも紆余曲折が予想されます。引続き慎重に先行きを早通しながら、対処していく必要があると考えております。

一方、欧米のドラム缶工業会と当工業会で、結成いたしましたICDM（国際鋼製ドラム製造業者連合会）の活動もいよいよ、本格化してまいりました。当工業会といたしましても、積極的に国際交流を進めていくと共に、国際標準化問題等の我が国に影響を及ぼすテーマ等については、ユーザー業界のご意見も含めて、主張すべき点は積極的に主張していく必要があると考えます。

このような状況のなかで、私は、当面する工業会の課題として、次のようなものがあると考えております。

第1は、来年の神戸国際会議を含めた国際化への対応であります。ICDMも本年、規約を制定し、国際会議およ

び役員会を軸として、その活動も軌道にのってまいりました。さらに、今年4月には、我が国が中心になってアジア・オセアニア地区の工業会であるAOSD（アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協議会）を発足させました。

これらの場を通じて、情報の交換を行うとともに、国際規格問題や、環境問題などの共通の課題に対し、我が国の立場を主張し、真摯に議論を展開して解決を図っていくことが、国際交流を進めていくうえで、最も大切なことであると考えます。

とくに、今年10月のICDM役員会において、来年11月の神戸での国際会議の大綱が決まりました。ホスト国として、この国際会議を成功裡に終わらせるため、当工業会をあげて、その準備および運営に当たる必要があります。関係者のご協力をよろしくお願いいたします。

第2は、業界の共通課題への積極的取り組みであります。これまでも、UN問題や口金問題など工業会メンバーの共通の課題について、関係委員会を中心に活発に取り組むと共に、技術交流会等を通じて、認識を深めてまいりました。今後も、技術問題に関する共同研究や、物流問題などの共通課題に積極的に取り組み、その成果をあげていくことが工業会の重要な使命であると考えております。

第3は、環境問題への取り組みと、業界のイメージアップであります。昨年は、日本ドラム缶更生工業会（JDR A）と共同して、ドラム缶・ペール缶のイメージアップを目的とした「ロゴマークおよびスローガン」を制定いたしました。

さらに、カリブ海のバージンアイランド小学生による日本でのドラム楽器演奏会に協賛し好評を得ました。ドラム缶・ペール缶の有する運搬、貯蔵容器としての貴重な効用を正しく理解していただくための広報活動を、今後とも継続かつ精力的に展開していきたいと考えます。

あわせて日本ドラム缶更生工業会とも連携して、リサイクル問題や空ドラム対策等にも積極的に取り組んでまいりたいと思います。

関係者のご理解とご協力を重ねてお願いいたします。

ICDM国際会議について

去る10月17日～18日、神戸で開催されたICDM役員会で、ICDM国際会議の開催要領が次のように決定しました。

会 期：1995年11月5日(日)～10日(金)

会 場：神戸国際会議場(神戸市中央区港島町6-9-1)

会議名称：“The Future of Steel Drum”

ICDM Conference Kobe, Japan, '95

ドラム缶イメージアップのための ロゴマークを制定・発表

ロゴマーク制定の経緯

ドラム缶工業会は、かねてからドラム缶のイメージアップのために、日本ドラム缶更生工業会と共同でドラム缶に関するロゴマークの作成を進めてきていましたが、このほどその成案を得、別図のとおり制定するに至りました。

ロゴマーク制定にあたっては、ドラム缶工業会および日本ドラム缶更生工業会を中心に、ドラム缶を扱う関係者に広く案を公募いたしましたところ、282点もの応募があり、担当者はうれしい悲鳴を上げるほどでした。応募作品のなかにはプロ顔負けのものや捨てるには惜しいセンスのものなどがあり、選考委員を悩ませましたが、何度にもわたる真剣な討議の結果、水上喜且氏（水上工作所社長）の作品が入選と決まりました。これを原案に、デザイナーによる若干の修正を加えて最終的に完成を見たのが、この図柄であります。



このマークのデザインコンセプト

このマークは、私どもの3つの思いをシンボライズしたものであります。

まず、ドラム缶を抱き込む無限大マークは、無限の需要によりドラム缶の生命は永遠であること、またドラム缶が洗浄して繰り返し使用され、さらにスクラップとして再生される無限のリサイクルに生きていることを示しています。

次に、この無限大マークはアルファベットの“S”をイメージしていますが、これはSteel Drumの“S”を意味しており、さらにSteel Drumは“Strong”で“Safe”であることを主張しております。

第3は、右上がりの矢印のデザインですが、これは両工業会がドラム缶を中心に常に向上意欲をもってチャレンジしていく精神を表しています。

マークの使用について

今後私どもは、ドラム缶が汎用性・堅牢性・経済性・環境保全性等の面において優位性を持つ優れた容器であることをPRするため、このマークを幅広く使用していきたいと考えています。具体的には、ドラム缶工業会で発行する機関紙や刊行物、封筒やレターヘッドなどに、また会員各社においてもそれぞれの広報誌やパンフレットその他刊行物、工場建屋からトラック、さらには各人の名刺に至るまで愛用していくことになります。

またこの夏には、米領バージン諸島の子供たちがスチールパン（ドラム缶を加工した打楽器）の演奏旅行に来日した際、私ども両工業会がそれを後援することとなり、制定されたばかりのロゴマークを刷り込んだTシャツを作成して希望者に配布いたしました。これが大変に好評を博すところとなりました。

このようなケースも含めこれから徐々に皆さんの目れることが多くなることと思いますが、そのときは私どものこうした願いを思い出していただき、ドラム缶が環境に優しく有用性の高いことを再認識されつつ、このマークにご愛顧を賜るようお願い申し上げます。私どももこのシンボルマークを通して、需要家の皆さん、さらには一般社会の皆さんに、パールを含めたドラム缶が一層親しまれ信頼されるようになることを心から願っているところであります。

アジアドラム缶国際会議開催さる —アジア・オセアニア鋼製ドラム協議会が正式に発足

第2回国際会議の開催

本年4月、シンガポールにおいて第2回アジアオセアニア地区ドラム缶製造業者国際会議が開催されました。会議は、ICDM (International Confederation of Drum Manufacturers = 国際鋼製ドラム製造業者連合会) での申合わせに基づき、日本のドラム缶工業会がアジア・オセアニア地区のドラム缶メーカーに呼びかけて開催したものであり、その第1回は3年前に東京で開催されています。今回は、開催場所についてシンガポール側が積極的に立候補し、熱心に準備に取り組んでくれたおかげで、大変にスムーズ



◆今年のプロ野球も、ジャイアンツの優勝でめでたく幕を閉じた。リーグ優勝のときには最終試合で決定という劇的效果を演出したと思ったら、日本シリーズでは圧倒的に不利の下馬評にも

かかわらず常勝西武に完勝した。

◆毀誉褒貶があるが長嶋さんという人、やはり異常な何かを持っている。もう彼の時代じゃないよと思いながら、Jリーグからプロ野球へ人気の潮流を引き戻したカリスマ性にはただ唖るばかり。銀座のパレードでは彼の現役プレ

ーを知らない男女が黄色い声を張り上げた。

◆それにしても、これで貴乃花が優勝しジャンボが賞金王にでもなればそれこそ天下泰平、世の中こともなし、景気だってすぐによくなりますよ。ねえご同輩！

で有意義な会議が開催できました。参加者は、日本からの37名を筆頭にアジア・オセアニア地区、さらにはヨーロッパ、アメリカからの参加もあって、計17カ国110名にのぼり、前回(93名)をはるかに上回る盛会となりました。

アジア・オセアニア

ドラム缶製造業者協議会の正式発足

今回の会議では、まず最初に総会が開かれ、組織体としての「アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協議会」(Association of Asia-Oceanic Steel Drum Manufacturers=略称AOSD)が正式に発足することとなりました。アジア地区におけるドラム缶メーカーの組織化は、ICDM内における日本の国際的公約の一つでしたので、これが実現したことを素直に喜ぶとともに、発足したばかりの未熟な組織を今後意義あるものへと着実に発展させていくのも我々の責任であると考えているところです。

なお、発足にあたってAOSDの会長には日本のドラム工業会理事長である安藤成海氏が就任(その後理事長交代により永井潤氏となる)、副会長にはインドのB.O. Singh氏、シンガポールのK.Y. Ng氏、韓国のK.H. Ryu氏の3人が就任いたしました。また、事務局は日本のドラム缶工業会のなかに置き、その専務理事である柴野正裕氏がAOSDの事務局長に就任することもあわせて承認されました。

国際会議—— 発表討論会について

総会に引き続き国際会議が開催されました。そのテーマは(1)各国の市場動向について、(2)技術および設備について、(3)ICDMの活動状況について、の3つでした。

各国の市場動向については12カ国からの報告があり、アジア・オセアニア地区全体で年間ほぼ3,500万本のドラム缶が生産されていること、その成長率は日本を除く他の諸国はかなり高いものとなっていることなど、業界の現状と当面する諸問題の概要を把握することができました。

技術および設備については7カ国から10件の報告がありましたが、特にISO9000シリーズへの対応問題が各国とも避けて通れない課題となっていることがうかがわれました。

以上が会議の概要であります。参加者各人の問題への取り組みは極めて熱心で、質疑応答はしばしば時間をオーバーし、発展途上にある成長力の強いアジアを実感させる会議となりました。

なお、次回のAOSD国際会議は、インドの強い招請により、3年後の1997年にボンベイで開催されることが決定しております。

平成6年(4~9月度上期)ドラム缶・缶種別・用途別出荷本数

単位：千本

缶種	用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比
		200 Q 缶	874	4,158	418	75	127	5,652
ペール		6,397	5,142	605		300	12,444	100.9
100 Q 缶		10	83	1			94	95.9
50 Q 缶			116				116	111.5
アス缶型		1	6				7	70.1
その他容量缶		2	380			2	384	86.5
亜鉄板鉛缶	200 Q		48	4	1	4	57	90.5
	その他		96	微			96	72.7
	小計		144	4	1	4	153	78.5
ステン缶	200 Q		6	1	微		7	70.1
	その他		7				7	77.8
	小計		13	1			14	73.7
合計		7,284	10,042	1,029	76	433	18,864	99.8
構成比		19.2	70.4	7.0	1.1	2.3	100	—

(注) 構成比はドラム缶の出荷トン数の構成比。

DATA
FILE



株式会社 大和鐵工所

当社は、昭和7年に創業し、昭和12年に鋼製ドラム用口金の製造を開始いたしました。

とくに技術開発には総力をあげ、ねじ精度の向上のために、特殊なカムによる高速自動ねじ切盤を開発し、品質の均一な大量生産を可能といたしました。

また、クリーン化に対処した外ねじ口金、フランジガasketの安定をはかるための凸部付きフランジ、取り付け安易な樹脂製キャップシールの開発等を行い、皆様にご愛顧をいただいております。今後もお客様に喜んでいただける製品の開発、品質の向上、製品造りを信条として日々努力いたす所存でございます。

今後ともご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



三喜プレス工業株式会社

当社は鋼製ドラム用オープンバンドを製造・販売し皆様にご愛用いただいております、東京城東地区に立地するメーカーです。

昭和32年に鋼製ドラム用オープンバンドの製造を開始いたしました。当初は需要および種類も少ない状況でしたが、現在ではドラム缶内容物の変化および技術開発に伴うドラム缶製造方法の進歩により、オープン缶の需要・種類が多くなり、鋼製ドラム用、ステン用（ファイバー用、ポリ用）、各種オープンバンドを生産するにいたっております。

今後ますます多様化するお客様のニーズに対し、品質の向上、豊富な品揃えをモットーとして努力してまいります。これからも引き続きご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



株式会社 城内製作所

弊社は昭和40年2月、尼崎市の城内で、各種缶用バンドの専門メーカーとして誕生しました。

平成4年3月、本社・工場を建設し、従来の2工場を集結、生産効率向上に努めています。

来年は創立30周年を迎えますが、これもひとえにお客様、お取引会社等の温かいお引き立ての賜物と、従業員一同深く感謝いたしております。

弊社は缶用バンド専門メーカーとしての責任を自覚し、品質第一主義に徹し、即応体制を整えています。またお客様のご要望には速やかな応答を旨としております。なにとぞ今後共にご愛顧賜りますよう、お願い申し上げます。缶用バンドのことなら誠意がモットーの城内製作所へ！

ドラム缶工業会

東京都中央区日本橋茅場町3-2-10

(鉄鋼会館3階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

ADK 秋田ドラム工業株式会社

秋田市土崎港北6-2-22 ☎ 0188-45-1105



川鉄コンテナ株式会社

大阪市北区堂島浜2-1-29 ☎ 06-344-9711



協和容器株式会社

新潟市下木戸2-4-20 ☎ 025-274-0371



鋼管ドラム株式会社

東京都中央区銀座9-11-11 ☎ 03-3574-0711



斎藤ドラム缶工業株式会社

横浜市鶴見区生妻3-15-14 ☎ 045-521-3881



山陽ドラム缶工業株式会社

岡山県倉敷市中島1230 ☎ 0864-65-3680



新邦工業株式会社

東京都千代田区神田佐久間町3-27-3 ☎ 03-3861-5285



ダイカン株式会社

大阪市此花区島屋2-11-63 ☎ 06-466-4601



大同鉄器株式会社

尼崎市杭瀬南新町3-2-21 ☎ 06-488-2468



株式会社東京ドラム缶製作所

東京都葛飾区東四ツ木2-23-16 ☎ 03-3695-8511



東邦シートフレーム株式会社

東京都中央区日本橋3-12-2 ☎ 03-3274-6212



株式会社長尾製缶所

和歌山県有田郡吉備町野田144 ☎ 0737-52-2591



日鐵ドラム株式会社

東京都江東区亀戸1-5-7 ☎ 03-5627-2311



株式会社前田製作所

東京都港区新橋1-5-5 ☎ 03-3573-7101



森島金属工業株式会社

千葉県佐倉市大作2-5-5 ☎ 043-498-3551



株式会社山本工作所

北九州市八幡東区大字枝光1950-10 ☎ 093-681-2431



株式会社ユニコン

大阪府高石市高砂2-7 ☎ 0722-68-0515

ひびき No.8 (平成6年11月22日発行)

発行人 ドラム缶工業会
専務理事 柴野 正裕

本誌は再生紙を使用しています。